

2017年 金融広報中央委員会主催

第15回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

特選 金融広報中央委員会会長賞

### 希望への道

福島県・福島県立視覚支援学校高等部 2年 遠藤 未来

私には視覚に障がいがあり、右足にも軽い障がいがあります。生後2か月で網膜芽細胞腫が見つかり、右目は義眼、左目の視力は0.2程度です。3歳のときに横紋筋肉腫が鼻だけでなく、リンパ節にも転移しましたが、奇跡的に完治しました。足の方は中学一年生の時に、踵にできた腫瘍を取り除く手術をしました。普通に学校内の移動やバス通学はできますが、長時間の歩行はまだできません。走ったり飛び跳ねたりという激しい運動もできません。そのこともあり将来のことではたくさん悩みました。

「私は看護師さんになりたい！」

というのは小さいころからの口癖でした。目や足の障がいがあるから、なれないってわかっているけど、中学二年生までどうしてもこの夢を諦めきれませんでした。

見えないことで悩んだことや、いじめられたことは今までほとんどありませんでしたが、この将来の職業のことでは、

「私が視覚障がい者でなければ看護師になれたのに、おまけに足まで。これからどんな仕事につけばよいのか？」

とかなり後ろ向きになりました。

私の両親は全盲です。母は中途失明で盲学校に入り、あん摩マッサージの資格を取り、治療院や温泉マッサージで働いていました。

父は、幼いころから全盲で、はり、灸、あん摩マッサージ師の資格を取り、住み込みの治療院に勤めたり、福島県から離れて就職したり、自分で訪問マッサージ店を開業したりして、資格を取ってから23年間色々な仕事を経験してきました。今は大きな老人介護施設で機能訓練指導員として働いています。

また父が開業した訪問マッサージ店で母も一緒に働いていたこともあります。私も

あとを継ごうと考えたこともありました。

そんな時にたまたま、インターネットで職業のことを調べていたら、「理学療法士」という資格を見つけました。実は足のリハビリで理学療法士さんにお世話になったこともあり、その資格のことは知っていました。でも、

「どうせ視覚障がい者は、なれないでしょ。」

と思っていました。

しかし、父の知り合いに弱視で理学療法士として働いている人がいると聞きました。

「これだ！」

と思いました。

「何より足のリハビリを経験した私だからこそ患者さんの目線になって考えて、優しい言葉をかけて、一人でも多くの人を元気にしていきたい。また歩けるようにしてあげたい。」

と心から思いました。中学三年生の時に自分の進路に対する考えが固まりました。

高校からは勉強の遅れなども原因で、福島県立視覚支援学校に入学しました。この学校には視覚に様々な障がいを持っている生徒が在学していて、高等部普通科には、大学に進学することを目指している人や、就職することを目指している人もいて、それぞれに悩みもありますが希望もあります。

大規模な地域の中学校では味わうことのなかった少人数ならではの良さがあり、毎日真剣に勉強にも取り組み、とても楽しく生活しています。

この先の私のライフプランは、明確です。その通りになるとは限りませんが、自分なりに考え、悩んで、ようやく出した計画です。

まず、高校3年間では、できるだけたくさんの経験をすることというのが一つの目標でもあります。視覚支援学校にいと自分の狭い世界に閉じこもり、外部の人と関わろうとせず、チャンスがあるのに一歩踏み出せないということになるのではないかと考え、それはとてももったいないし、残念だと思いました。だから私は外部の企画になるべく参加してたくさんの方と交流を深めていきたいです。

もう一つ、高校3年間での目標は、自分の力で色々なことに挑戦することです。例えば一人でどこか遠いところに出かける、新幹線に乗る、道を覚える。このような基本的なことは、高校生としてできるようにならないとだめだと思います。視覚障がい

は全く理由になりません。他にも生徒会役員としてある程度は自分で考え、行動し、企画する力も私には必要です。

高校卒業後は理学療法士になるために、視覚障がい者を対象とした筑波技術大学の理学療法学専攻に入学したいと思っています。この大学を決めるのにも、ずいぶん悩みました。「行きたい」というだけでは行けない大学も少なくありませんでした。学費の問題、近くに学生寮があるか、学力的に目指せるかどうかなど、考えなくてはならないことがたくさんありましたが、最終的にこの大学を目指すことに決めました。

国家試験に合格したら、理学療法士として病院や老人介護施設で働きたいです。理学療法士は医師の指示がなければ治療プランを立てることもできないし、医療行為を行うこともできません。自分で開業することももちろんできません。でも私は開業して店を大きくしていくことよりも、病院で苦しんでいる人や、毎日このまま一生歩けないのではないかという不安と闘っている人たちに寄り添い、一緒にリハビリをして、話を聞いてあげることの方が、私がやりたいと思う仕事です。

だから視覚障がいのある私にとってどれだけ大変な仕事であっても私はこの仕事を選びます。

働くこととは、一言で言えば、大変なことだと思っています。それは周りの大人の人たちの話をよく聞くからです。「楽しいなんて思う人はごく一部」、そんなこともよく聞きます。まだバイトさえしたことがない私にはよくわからないというのが正直なところです。

中学生の時の職場体験の反省に、「働くことはどんなことだと思いますか？」という質問に対して、私は「人の役に立つこと」と書きました。でも実際に働くことはそんなに甘いものではないとわかりました。トラブルはつきもの、他の人のミスをかぶらなければいけないこともあり、学生の私たちにはまだ想像もできないような世界だと思います。そんな厳しい現実ばかり聞いていると、自分はやっていけるのだろうかと不安にもなってきます。

私は人間関係を築くことが苦手で、人間同士のトラブルも嫌いです。対立することや嫌われることをなるべく避けて、穏やかに過ごしたいと思っていました。しかしそんな私が少しだけ変わったのは、生徒会役員になったことがきっかけでした。

小、中学校の頃は大人数だったこともあり、意見を言ったり、何かの中心になって

活動することがほとんどありませんでした。でも生徒会に入り、学校を良くするために、なるべくみんなが行事を楽しめるように先生や先輩に意見を言ったりしているうちに、自分の意見をはっきり伝えられるようになってきました。私にとってのこの生徒会活動は、学校のためでもあり、自分を成長させるものでもありました。

これからのライフプラン、つまり生きていく上で自分の中でこれだけは守っていきたいということが二つあります。

一つ目は、「正直でいること」です。正直というのは全てにおいてです。ミスしたら正直に謝る。自分の気持ちに正直に。隠さないで正直に言う。働く以前に人として大事なことだと思います。

言い訳も、ごまかしも、嘘も、いつか何らかのかたちで分かってしまいます。信用が失われます。そういうことにならないために、私は正直に生きていきたいです。

二つ目は、「笑顔でいること」です。視覚支援学校の卒業生で、全盲なのにすごく明るくて、いつも笑顔の女性の先輩がいました。彼女のことを見て悲しくなる人は誰もいません。みんなが彼女のように大きな笑い声で笑いたくなります。明るくなれます。私はいつも笑っているようなタイプではありません。どちらかというと静かな方で、声を出してあまり笑ったりしません。だからこの先輩のように、目が見えなくて大変だということなんて誰にも感じさせないくらい、明るく笑顔でいっぱいの人のことを心から尊敬します。自分なりに明るく笑顔で生きていきたいです。

私がこれまで経験してきた楽しかったこと以外のつらかったことや、苦しかったことも全て希望への道となって今、足跡がはっきりと残っています。私の夢への挑戦、未来への挑戦は、既に始まっています。足を止めることなく、自分の夢に向かって、未来に向かって、一歩ずつ確実に希望への道に足跡をつけていきます！

同じく、佳作に普通科二年 齋藤 希璃さんが輝きました。

「いつか大きな家を」と題し、東日本大震災の避難経験を絡めて、幼い頃から視覚障がい者としての働き方を模索してきた自己を冷静に見つめ、長期的には福祉のお世話になった分を、「納税」という形でお返ししたい、『人生という観点では、健常者と障がい者に優劣はないと思います。障がいを持つと苦勞が増えるのは事実ですが、それは不幸なことではなく、また一つの人生の形です。自分の人生の現実と向き合いつつ

生き方を見つけていくことが大切です。僕はこれからも現実を見失うことはしたくないです。現実から逃げる事だけは絶対にしたくないです。それをしてしまったら負けだと思えます。だからこれからもそれを忘れずに生きていきたいと思えます。そしていつか母に、広い一軒家を建ててあげたいと思っています。』と結びました。

表彰式において、金融広報中央委員会吉國眞一会長様から、全国の高校生から2908点の応募、特選5編、秀作5編、佳作50編の中に本校から2点入ったということ、高校生の段階で「ライフプラン」を明確にもっていることは大変すばらしいこと、「金融教育はまさに生き方教育である」というお言葉を賜りました。

金融広報中央委員会ホームページ〉知るぽるとへのリンク

[https://www.shiruporuto.jp/public/document/container/concours\\_ronbun/](https://www.shiruporuto.jp/public/document/container/concours_ronbun/)

© 金融広報中央委員会 2017

